

丹羽 謙治

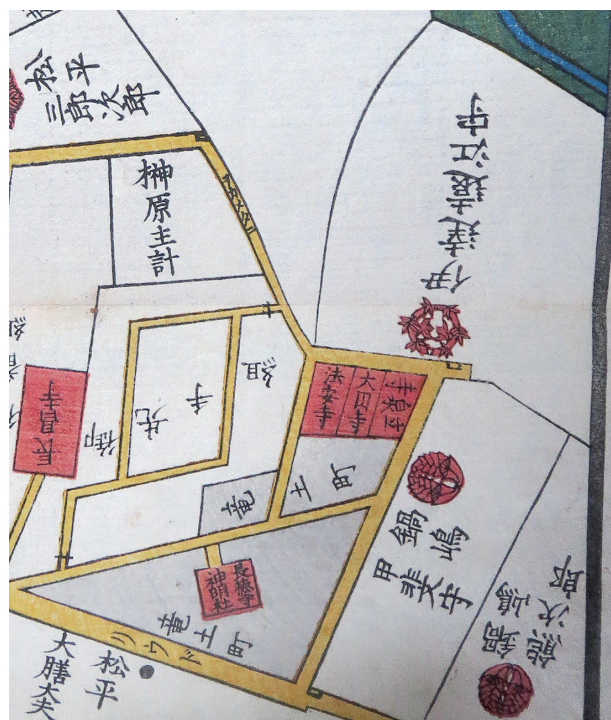
Ⅶ 上月行敬の描いた宇和島藩上屋敷

上月行敬は嘉永4年(1851)、前年の琉球使節の行列と江戸城下の賑わいを故郷の子弟に伝えるために、『琉球人行粧之図』『琉球人往来筋賑之図』(「琉球使聘禮之圖」と総称)を描いた。『行粧之図』は薩摩藩主、同世子に先導された使節および警護の行列を写したもので嘉永3年度の使節の実態を詳細に知ることができる貴重資料であるが、『往来筋賑之図』は使節の通路に当たる芝口一丁目を舞台に江戸の繁栄ぶりを多様な職人や商人、通行人を描くことによって示し、大名の江戸城からの下城風景や自らが住む宇和島藩上屋敷(以後、「龍土屋敷」)の様子を絵画として描いた点、前者に優るとも劣らない価値を有している。

まず最初に龍土屋敷の歴史について簡単にまとめておこう⁽¹⁾。

江戸麻布龍土の宇和島藩上屋敷は、明暦元年(1655)に、もと日比谷にあった上屋敷の補助屋敷として購入されたもので、明暦3年(1657)1月18日のいわゆる明暦の大火で上屋敷が焼失したあと、上屋敷は普請が行われ再建されるが、龍土屋敷はその後周辺の土地を購入しながら敷地を拡げていった。天和元年(1681)、宇和島伊達家は日比谷屋敷を丹波篠山(5万石)松平豊前守信庸に引き渡し、龍土屋敷を上屋敷とし、一方、木挽町に中屋敷(12,220坪)を拝領した。龍土屋敷(32,714坪余[東京都1960])は明治2年(1869)民間に払い下げられるまで上屋敷として機能した。

この龍土屋敷は、江戸に七つあるとされる丘陵のうち、「赤坂・麻布台地」に存在する。台地の尾根に厚木街道(国道246号線、青山通り)が通り、



【図1】尾張屋版『麻布絵図』(嘉永4年刊、筆者蔵)

そこから張り出した舌状台地の上に大名屋敷が設けられた。その一つが龍土屋敷である。現在は国立新美術館及び政策研究大学院大学(港区六本木7丁目)となっているが、地形や道筋は周辺も含めて江戸期のものをよく保存している。

上月の描いた龍土屋敷の表御門は、現在の政策研究大学院大学の正門付近【図2】にあったと推定される。上月の絵では鍋島甲斐守の屋敷の前の道が描かれていないため門の位置が分かりにくい。切絵図【図1】では伊達家の竹に雀の家紋の位置が表御門に当たる。【図1】では家紋の右下、道路に□の印が見えるが、これが上月の絵図でいう表御門の右手前にある辻番所である。表御門から向かって左は



【図2】 政策研究大学院大学の正門付近（筆者撮影）

ゆるやかな坂道となっている。上月行敬は下の御門（長屋門）の前を正確に坂道として描いていたのである。

上月行敬が江戸に滞在していた頃、藩主伊達宗城の命で龍土屋敷の測量図の作成が行われていた。担当したのは同藩士の三浦義質^{みうらよしきた}で仁科茂助が補助した。完成は嘉永5年（1852）3月である（本書IV-11⁽³⁾参照）。

井上淳氏はこの三浦図と上月行敬描く龍土屋敷の絵を比較され、「測量図と絵図という性格が異なる史料は相俟って、宇和島藩江戸上屋敷の姿をありありと現在に伝えている」と、両者の相補的な関係を評価された [井上 2018]。上月行敬が描く龍土屋敷は、屋敷の正面にあたる表御門を中心とした部分と通りに近い部分であり、全体の1割にも及ばないほどの面積を描いているにすぎないが、絵画として江戸武家屋敷が描かれたという点で重要である。

ここでは、大名屋敷の顔ともいべき表御門を中心に上月行敬の描いた屋敷の姿を見てみたい。

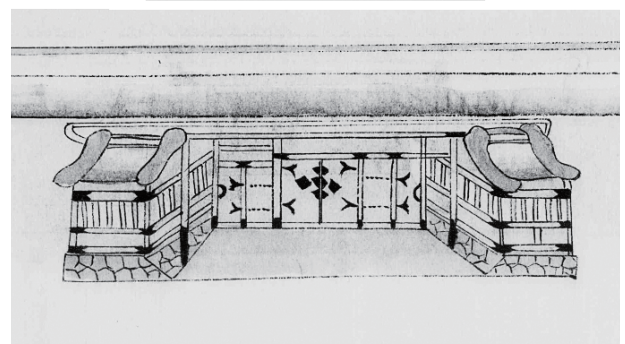
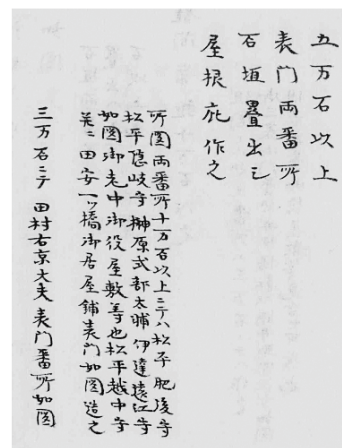
宇和島藩伊達家は、伊達政宗の長子である秀宗を祖とし、伊予国宇和郡10万石を領有する国持並の外様大名である。明暦3年（1657）に秀宗が隠居しその際五男の宗純に吉田藩（3万石）を分知したため、一時7万石となったが、その後元禄9年（1696）石高直しを行い、10万石に服している（[宇神 2011]）。

上月行敬が描いた表御門の建築年代は判然としえない。一方、門の形式（格）については『青標紙』（天保11年）などによると、5万石以上の大名のものに該当する。門の形が上記の7万石の時代に建てられた、あるいは10万石に復した後もその形が継続したためとも考えられるだろう。

【図3】は『要篋辨志年中行事』であるが、これに類するものは『青標紙』（国立国会図書館蔵）や「諸家家格儀式等書上」（江戸東京博物館蔵）などが多数存在する。

書き込みによれば、「五万石以上表門、両番所、石垣畳出シ、屋根庇作之」（読点は引用者）とあり、左右両側に番所を置き、その形式は石垣の上に、畳を置くように張り出して設置する形式で、かつ屋根庇を付けるものである。10万石以上の多くの大名は両番所の屋根は唐破風形を取るが宇和島伊達家はこの形式を取らない。その後の注記（読点、下線は引用者）には、

所圖兩番所、十萬石以上ニテハ松平肥後守、松



【図3】『要篋辨志年中行事』

（国立国会図書館蔵、デジタルコレクションによる）

平隠岐守、榊原式部太輔、伊達遠江守如図、御老中御役屋敷等也、松平越中守并ニ田安、一ッ橋御居屋鋪表門如圖造之、三万石ニテ田村右京大夫表門番所如図、

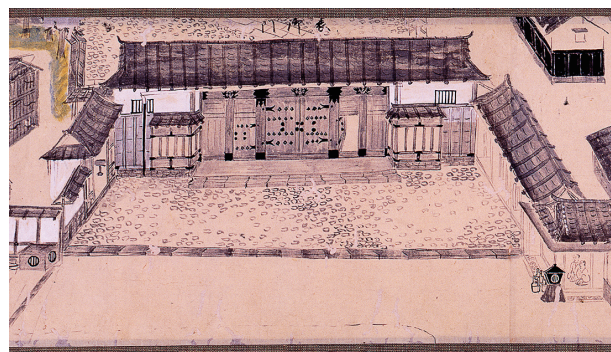
とあり、10万石以上の大名家で例外的にこの形式の表門を持つ大名の一つに伊達家が挙がっている。「両潜」に出格子の「両番所」、「片庇」の屋根——上月行敬の描いた図【図4】は上記の型に一致していることが見て取れるだろう。

一方、前稿〔丹羽2017〕で指摘したように、上月描く龍土屋敷の表門には、伊達家の紋所（竹に雀、【図5】）の一部が見えていた。これは実態を反映しているのであろうか。幕末に流行する泥絵には大名屋敷が多く描かれたが、紋所を描くものは管見では見つけられていない。江戸時代の武家屋敷の門に家紋が設置されていたかどうかを以下に検討することにした。

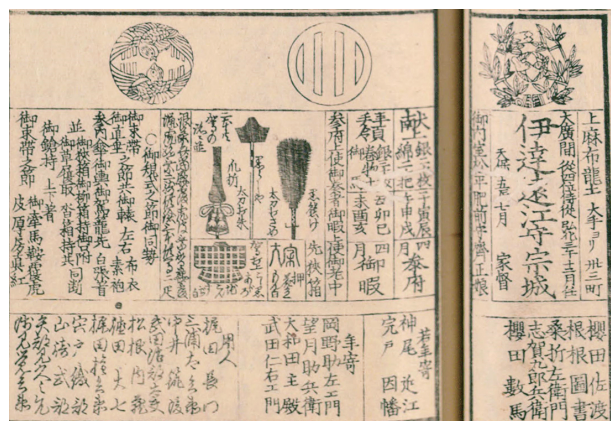
東京に現存する武家屋敷門を〔江戸東京たてもの園2001〕は東京大学本郷キャンパスの「加賀藩上屋敷御守殿門」（通称「赤門」）他、7門紹介している。そのうちの一つ、大田区下丸子にある蓮光院（壽福山円満寺、真言宗智山派）の山門は元武家屋敷の門で、この門の冠木の中央に丸に桔梗の紋が見える⁽⁴⁾。江戸期に付けられたものかどうかは不明ながら設置例の一つといえよう。

江戸東京たてもの園には大正期、港区白金にあった宇和島伊達家の屋敷の表門が保存展示されている【図6-1】。大名屋敷の門を模して作られ、すべてケヤキで作られているという〔江戸東京たてもの園2001〕。この門の冠木には正面に竹に雀の、左右両側に豎三引両の紋の木彫が嵌めこまれている【図6-2】。

一方、これも江戸期のものではないが、歌川国輝の錦絵「近世史略 薩州屋敷焼撃之図」（明治24年、矢沢久吉刊）には、桐紋とその左右に丸に十字の紋を冠木に取り付けた黒い武家屋敷門（唐破風の屋根をもつ両番所が国持大名の格式を示している）と海鼠壁の長屋が描かれている【図7】。まだ江戸



【図4】上月行敬が描いた龍土屋敷表門
（鹿児島大学附属図書館蔵）



【図5】『大成武鑑』（嘉永元年、出雲寺版）
（国立国会図書館蔵、デジタルコレクションによる）

の記憶が残る時代の浮世絵であり、実際の武家門を反映している可能性が高いのではなかろうか。

文献としては前述の『青標紙』の家格による表門の形式を記した図の後ろに、「但、表門ニ家々之紋附る事、國家並帝鑑間、柳之間、交代寄合杯に限⁽⁵⁾」とあり、国持大名から交代寄合までかなり幅広く家紋を門に付けることが行われていたことを窺わせる記述がある。

上月の絵では家紋がわずかにそれとわかる書き方をしている。わざわざ現実にはない家紋を描く必要性はないと考えられること、上記の二例と共通する紋の配置が見られることから、江戸期にも門の冠木に家紋を置くことがあったと考えるのが自然ではないだろうか。

なお、前稿では門の乳鉾や八双金具と同じ色で紋が描かれているところから、金属（金具）であることを想定したが、江戸東京たてもの園の門のように



【図 6-1】 伊達家の門（江戸東京たてももの園）
（渡辺美季氏撮影）



【図 6-2】 伊達家の門（江戸東京たてももの園）の家紋
（渡辺美季氏撮影）



【図 7】 歌川国輝「近世史略 薩州屋敷焼撃之図」（東京都立中央図書館蔵）

木彫の可能性もあることを付け加えておきたい。⁽⁶⁾

紋所のほか、上月の絵には門に樋が描かれている⁽⁷⁾。また、門の前には玉砂利が敷き詰められていることも、石畳で描かれていることが多い武家屋敷門の一般的なイメージとは異なる点として注目される。

本書で橋口亘氏が井戸の位置をめぐって、三浦義質の測量図および考古学的なデータから、上月の描く絵図の正確さを指摘しているが、門についても正確な情報を伝えようとしていると考えてよいのでは

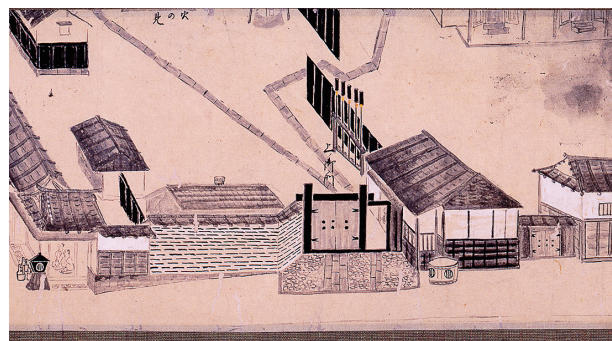
なかろうか。

次に表門の向かって右に描かれた「上ノ御門」周辺を見てみよう。この門の脇に三浦図に「御門番」「札場」と書かれた一棟の建物がある。藩士や出入りの商人などが日常的に使う門がこれであったと思われるが、「札場」とは商人など他所から来た者に対して「木札」を渡し、屋敷を出る際に回収する場所であった[高橋 2001]。延享3年6月の「江戸麻布御屋鋪御門条目」⁽⁸⁾には、

一 常之御門出入之町人は、渡置候木札を改通可申附、日々之商人入候時は御門ニ而木札を渡、帰候時右之札取返可申事、とあり、「常之御門」が「上ノ御門」に相当するらしいこと、「札場」の機能がどのようなものであったかがよくわかる。

最後に、藩邸の内部にある「見隠」（三浦の測量図の表現）の意味について触れておきたい。絵引の本文でも触れたが「見隠」は屋敷の公私の空間を分けるために設置されていると考えられる。これには二つの意味がある。藩士の居住空間である長屋などが表の空間から見えないようにするための仕切りであると同時に、来訪者に表の世界を見せないようにする仕切りであるということである。上記の「札場」の機能からもわかるように、屋敷に出入りする商人など外部の人間が屋敷を訪れることが多かった当時、外部者の視界を制限しておく必要があった。屋敷の南側の御亀谷の部分は谷になっているため、地形によって自然と空間が分かれることになるが、屋敷の北側は御殿とほぼ同じ平面に位置するため、特にこのような板塀（見隠）を設ける必要があったのであろう。

こうした屋敷内外の実態がわかるのも絵図ならで



【図8】上月行敬が描いた龍土屋敷上ノ御門

（鹿児島大学附属図書館蔵）

はのものである。

嘉永4年（1851）に上月行敬が龍土屋敷を描いてから4年後の安政2年10月、同屋敷は安政の大地震に見舞われる。さらにその4年後の安政6年11月、今度は龍土屋敷が火元となり龍土屋敷ならびに周辺地域に甚大な被害が出る。表門などは類焼を免れたようであるが、明治維新の翌年、龍土屋敷は伊達家の手を離れることになる〔東京都生涯学習文化財団2003〕。それは明治2年2月13日に東京府が「朱引内外」を設定し、朱引外は諸屋敷、明地を開墾し相応の物を作るため、これまで朱引外に居住の朝臣は朱引の内に転居または借宅するよう命じたためであった。⁽⁹⁾

【注】

- (1) 以下、宇和島藩龍土屋敷の歴史については〔東京都生涯学習文化財団2003〕による。
- (2) [陣内1985]。
- (3) [東京都生涯学習文化財団2003]による。[井上2018]によれば、三浦義質は文政4年（1821）生まれ。天保12年（1841）に兄の養子となり、後に三浦家九代となる。伊達家の採用した西洋砲術威遠流を習得するとともに、嘉永3年（1850）参勤で江戸に入り、江戸の測量家渡辺以親に入門、その成果がこの龍土屋敷絵図という。
- (4) 「蓮光院の概要」「蓮光院所蔵の文化財」
https://tesshow.jp/ota/temple_shimomaruko_renko.html（令和元年11月29日閲覧）
これによると「備前池田家の表門であったと伝えているが詳らかでない…」との東京都教育委員会の掲示があるという。一方、丸に桔梗紋から駿河國小島藩のものとする説もある。
- (5) 国立国会図書館蔵本（W358-N9、国会図書館デジタルコレクション）による。読点は引用者。
- (6) 橋口巨氏の御教示。
- (7) 服部佐智子氏の御教示。氏を通じて平井聖氏に確認を取っていただいた。
- (8) 宇和島伊達文化保存会蔵。[江戸東京たてもの園2001：8]掲載の図版による。
- (9) [東京都1961a：416]。

【参考文献】（五十音順）

- 井上淳 2018『宇和島藩の麻布龍土屋敷』『伊予の古地図～国絵図から村絵図まで～』伊予史談会
 宇神幸男 2011『宇和島藩』現代書館

- 財団法人東京都歴史文化財団 江戸東京たてもの園編 2001『宇和島藩伊達家—収蔵建造物「伊達家の門」の背景』
財団法人東京都歴史文化財団 江戸東京たてもの園
陣内秀信 1985『東京の空間人類学』筑摩書房
高橋英久 2001「武家屋敷の門」(『江戸東京たてもの園 2001』所収)
東京都 1960『東京市史稿 市街篇 第49』東京都
東京都 1961a『東京市史稿 市街篇 第50』東京都
東京都 1961b『東京市史稿 市街篇 第51』東京都
(財)東京都生涯学習文化財団 2003『宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡—新国立美術展示施設(ナショナルギャラリー・
仮称)建設に伴う調査—』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第134集 東京都埋蔵文化財センター
丹羽謙治 2017「上月行敬筆『琉球人行粧之図』『琉球人往来筋脈之図』—鹿児島大学附属図書館本と鹿児島県立図
書館本のあいだ—」『雅俗』16 雅俗の会
平井聖・浅野伸子 2004『泥絵で見る大名屋敷』学習研究社
柚山俊夫 1990「江戸の宇和島藩上屋敷絵図について」『伊豫史談』279・280 合併号 伊豫史談会

【謝辞】

小稿をなすに当たり、御協力をいただきました平井聖氏、服部佐智子氏、橋口亘氏、渡辺美季氏、および図版の掲載の許可をいただいた東京都立中央図書館に感謝申し上げます。